The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	はじめに
Author(s)	高安, 啓介
Citation	a+a 美学研究. 2023, 14, p. 8-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103369
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに

日々のニュースを通して、わたしたちは未来をつねに意識させられています。為替相場がどのように推移しているか、今後の戦況はどうなっていくのか、流行り病がどれほど蔓延していくかなど、この先どうなるのか気になる事案がたくさんあります。なかには、行動の指針として知っておきたい情報もありますが、今後どうなっていくかという未来予想はそれ自体、興味をそそるところがあります。紙の新聞をひろげて記事から記事へと目を動かしていく昔の習慣は、今日では時間を選ばずにネット記事をサーフィンする習慣にとってかわりつつありますが、世の中の成り行きへの漠然とした不安は、わたしたちをいっそう未来予想へと向かわせているように見えます。

大学において、社会問題の解決がよく言われるようになり、人文系の学問は肩身の狭い思いをしています。そこで、役に立たないことこそ役に立つのだ、という主張がいつも繰り返されます。この主張はたしかに正しさを含むとしても、こうした紋切り型から抜け出さなければならないとも思います。美学のような融通のきく分野ならば、現実に直面する問題にもっと向き合うこともできるはずです。それでも、上意下達のように社会問題の解決がもとめられると、理想の状態がはじめから設定されているかのようで、居心地の悪さを感じてしまいます。人文系の学問はむしろ物事の価値そのものを問うのですから、前提そのものを問い直させてほしい気になります。

未来という言葉を聞いてどんなことを思うでしょう。すぐに思い浮かぶのは、将来どうなるのかという予想の未来であるか、将来どうあるべきかという理想の未来であるか、二つのどれかではないかと思いますが、二つのどちらでもない仮想の未来について考えてみてはどうでしょう。仮想の未来とは、起こるかどうかも分からない、良いかどうかも分からない、これまでまったく眼中になかった可能性です。人類にとって世の中の成り行きは明るくないからこそ、何らかの変革がもとめられるのでしょうが、行きづまりを突破する考えはそう簡単に出てくるものではありません。そのようなとき、目先の関心からいったん離れて、未来について自由に考えてみたいものです。

アーティストは、人間の理想であったり、社会の理想であったり、何らかの理想を描くべきなのでしょうか。もちろんそうした名作はたくさんあります。それでも、芸術がもし世間で思われている理想をなぞるだけなら面白くありませんし、芸術である意味すらないでしょう。芸術やそれに類するフィクションは、起こるかどうかも分からない、良いかどうかも分からない、誰も考えてもみなかった可能性をしめしてこそ、意味があるものと思われます。絶望の淵にあって、教訓めいた話でなくとも、他でもありうる未来がとらえられたときに一筋の光明がみえることもありましょう。だからこそ、美学思想において、仮想の未来についての思索は一つの重要な課題だといえます。

文化研究において文化を問題にするときに複数形の文化がいわれるように、未来研究において未来を問題にするときも複数形の未来がいわれるようになっています。いまここで、予想の未来、理想の未来、仮想の未来、という区別について触れてみましたが、未来については他にも色々な区別がありえます。分野ごとの未来や、問題ごとの未来や、立場ごとの未来や、複数の見通しが重なりあったところで未来の意識が生み出されるものと思います。今回は「未来をつくる思想」という特集を組むにあたり、申し合わせはほとんどしていませんので、色々な位相の未来をみて取れると思いますが、布施氏の作品はまさに仮想の未来にかかわる例といえるでしょう。

高安啓介